

放流資源共同管理型栽培漁業推進調査事業（抄録）

池脇 義弘・斎浦 耕二

クルマエビを指標種として、種苗放流の効果や放流種苗の回遊実態などを把握し、それらをもとに種苗生産や受益者負担などの体制を整備してゆくことを目的に、瀬戸内海東部6府県共同でクルマエビの放流効果調査を実施した。平成12年度は事業の最終年にあたり、調査のとりまとめをおこなった。

なお、事業の詳細については、平成8～12年度放流資源共同管理型栽培漁業推進調査事業総括報告書「瀬戸内海東ブロック報告書」を参照されたい。

当事業では、クルマエビ種苗の放流効果を把握するために、兵庫県赤穂市地先に標識（左尾肢を切除）したクルマエビ種苗を、平成9年8月に18.3万尾（全長64～71mm）、平成10年7月に17.6万尾（全長48～53mm）放流した。

放流種苗は、放流後に、市場調査、買い上げ調査、標本船調査で追跡した。追跡調査の結果、平成9年放流群として86尾、平成10年放流群として282尾の標識クルマエビが確認された。

本調査結果の要約は、次のとおりである。

夏季に全長数十mmで放流したクルマエビ種苗は、放流後速やかに成長し、放流後数十日で体長150mmの漁獲サイズに達した。

放流クルマエビのほとんどは放流後2、3ヶ月の間に放流海域周辺（播磨灘北部）で再捕された。他海域への移動については、放流後2ヶ月前後で大阪湾に移動した個体が確認されたほか、放流翌年の春～夏季に紀伊水道へ移動した個体も漁獲された。

標識クルマエビの混獲率（漁獲物中に占める割合）から推定された回収尾数は、平成10年度群で約39,000尾（回収率22%）に達した。また、その90%以上は放流地点周辺海域である播磨灘北部で再捕された。

今回、22%（尾肢再生試験から得られた標識判別率80%を考慮すると、27.6%になる）という高い回収率が得られたのは、通常（体長30mm前後）よりも大型サイズで放流したこと、潜砂能力獲得と歩脚障害防止のために砂を敷いて中間育成したこと、放流前に囲い網で一晩馴致したことなど、放流後の生残率向上に有効と思われる対策によるものと考えられた。